

先週の礼拝メッセージ(2024年2月4日) ベン牧師

「主の庭の一日」 詩篇 84:1-13

「万軍の主よ、あなたの住まいはなんと慕わしいことでしょう。」(2節) あなたの住まいとは、神殿を指しています。この詩篇の作者「コラの子たち」は、聖歌隊のメンバーとして、主に仕えていました。

「私の魂は主の庭に思い焦がれ、絶え入りそうです。生ける神に向かって、身も心も喜び歌います。」(3節) 彼らにとって、主の住まい、主の庭、つまり礼拝の場は、慕わしく、思い焦がれ絶え入るばかりの場だと言うのです。さらに、今日の主題とした、「あなたの庭で過ごす一日は私の選んだ千日にもまさる。神の家の戸口に立つことは悪の天幕に住まうにもまさる。」(11節)と続きます。

当時の神殿で全焼のいけにえを捧げる礼拝は、一日仕事でした。祭壇で牛一頭が灰になるまで彼らは礼拝し続けたのです。時間にすると優に7、8時間は超えていたことでしょう。その間彼らはずっと立ちっぱなしで礼拝を捧げるのです。これが主の庭で過ごす一日の意味です。その一日が、日常生活の千日にも勝ると言うのです。それほどに神に礼拝を捧げると言うことは、喜びに満ちたものなのです。そしてそれは、「悪の天幕に住まう」、すなわち贅沢三昧の生活よりも、「神の宮の戸口に立つ」、つまり門番として立つことの方が優っていると言うのです。なぜこう告白できるのでしょうか。それは、神の臨在の中にいることの素晴らしさは何ものにも変え難い喜びであることを知っていたからです。

当時は、神殿の礼拝に集うこと自体、さまざまな困難を伴いました。

「嘆きの谷を通る者たちはそこを泉に変えます。秋の雨がそこをまた祝福で覆います。」(7節) という表現はしばしば人生の歩みに例えられて引用されますが、ここで作者が語っている直接の意味は、神殿までの道のりを、嘆きの谷のように大変な思いをして神殿に辿り着いた喜びを歌っているのです。主にある兄弟姉妹と共に、神を礼拝する喜び、祝福を歌っているのです。秋の雨とは、乾燥しているイスラエルにとっては、まさに神の祝福なのです。

当時の人たちは、想像を超えるほどの危険を犯して、それでも神殿へと向かったのです。それと比較して、今の私たちはどんな思いで礼拝に集っているのでしょうか。インターネットで自由に家にいて礼拝ができ、いろいろな教会の礼拝を選ぶこともできます。さまざまな事情で礼拝に集えない人にとっては、とてもありがたいことですし、教会にとっても礼拝を配信し

て、教会員のみならず多くの人々に福音が届けられるということは良いことです。しかしそこで、教会に行かなくても自分の好きな時間に、好きな牧師のメッセージを聞けるという理由だけで、教会に集うということをしなかったら、それは教会というものの理解が間違っています。なぜ集まるのか、それはまさに、キリストの体、共同体として神を礼拝するのは、集まってではできないことだからです。旧約、新約を問わず、聖書では共に集うことを非常に大切なこととして語っています。だからこそイスラエルの人々は、困難を乗り越え礼拝に集ったのです。教会はキリストの体、共同体、神の民の集うところです。

1人では「民」とは呼びません。イエス様はおっしゃいました。「二人または三人が私の名によって集まる場所には、私もその中にいるのである。」(マタイ 18:20) また、エフェソでは教会のことを、「教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方が満ちておられるところです。」(エフェソ 1:23) と語っています。教会とは建物のことではありません。その通りです。しかし、教会に神の民が集まるなら、そこに主は満ちてくださるのです。特別な場なのです。

主にある兄弟姉妹が集う教会の礼拝を、私たちが恋い慕うものでありたいではありませんか。

「神よ、私たちの盾を見てください。あなたの油注がれた者の顔に目を向けてください。」

作者は、自分たちの盾は貧弱で自分たちを守ることはできないと神の助けを求めています。しかしその後、「神である主は太陽、盾。主は恵みと栄光を与え、全き道を歩む者に良いものを惜しむことはありません。」と、神様こそが真の太陽、盾であると告白しています。だから、困難があっても安心して神を礼拝できると喜んでいるのです。そしてそのように礼拝を大切に思う者に、主は良いものを惜しまずに与えてくださるというのです。

主はそれほどに、神に信頼し、神を礼拝する者を喜ばれ、幸いな者としてくださるのです。今一度、礼拝の民とされた幸い、礼拝に集う喜びを覚え、主を心いっぱい賛美し、主を喜び主に喜ばれる礼拝をお捧げしようではありませんか。

